



熊本再春医療センター医療連携室だより



# 再春

令和4年 第1号

発行所：熊本県合志市須屋2659番地  
熊本再春医療センター  
編集：地域医療連携室

KUMAMOTO SAISHUN MEDICAL CENTER

熊本再春医療センターホームページ <https://saishun.hosp.go.jp/>



初日の出 日南海岸にて撮影

まばゆい日の光が太平洋を徐々に照らしていく。海面に“光の道”が出来るのを待ってシャッターを切った。

## 病院の理念

思いやりの心で  
患者、地域、職員に愛される病院

### 病院運営の基本方針

1. 治し、支える医療の実践
2. 専門医療の推進
3. チーム医療の実践
4. 地域医療連携の推進と地域への貢献
5. 経営基盤の安定
6. 働きがいのある職場作り

## Contents

1. 院長あいさつ ..... 2
2. 当院の新型コロナウイルス感染症診療について ..... 3
3. 病棟・部門紹介【つくし2病棟】 ..... 4
4. 開放型病院登録医紹介【岩根クリニック】 ..... 4
5. 病棟・部門紹介【臨床工学技士(室)のご紹介】 ..... 5
6. 開放型病院登録医紹介【北野小児科医院】 ..... 5
7. 皮膚・排泄ケア認定看護師の活動について ..... 6



## 新年のご挨拶

病院長 上山 秀嗣

新年あけましておめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症の第5波は昨年8月下旬をピークに徐々に減少し、10月以降は非常に安定した状態が継続しています。その一方で、ヨーロッパやアメリカなどの諸外国では感染の再拡大が収まらず、今後冬場にかけて日本にも第6波が到来する可能性は非常に高いと専門家は予測しています。新型コロナワクチンのブースター接種も開始され、新しい経口治療薬の登場も間近に迫っていますので、準備万端で臨みたいものです。医療機関の皆様方も同様な悩みをお持ちであるとお察し申し上げますが、常日頃より当院の運営および医療連携に多大なるご支援ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年7月23日より緊急事態宣言下での東京2020オリンピック・パラリンピックが無観客にて開催され、9月5日に無事終了しました。奇しくも開催直前に新型コロナウイルス感染症の第5波が到達し、東京都の1日当たり新規感染者数は4千人を超え全国的に感染者が激増しました。当初は本当に開催できるか否かが危惧されましたが、終わってみれば日本人のメダル・ラッシュで、選手たちの素晴らしいプレイに国民も熱狂できて幸いであったと思います。

令和元年11月に着工しました合志市による「御代志地区土地整備事業」ですが、昨年9月3日に熊本電気鉄道株式会社主催にて当院の留魂碑前において地鎮祭が行われ、以後「再春医療センター前駅」の移設工事が開始されました。残念ながら工事の進捗が遅れているようで、移設が完了するのは本年秋の予定とのことでした。国道387号線の拡幅工事等も進行中であり、工事期間中は当院に来院される際に迂回路を通る必要が出て参りますので大変ご迷惑をおかけしますが、何卒ご了承の程お願いします。

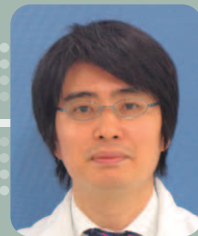
本年度より2名増員となりました消化器外科ですが、この半年間で手術症例数が確実に増加しています。沖野消化器外科部長が主体となり、膵頭部癌の膵頭十二指腸切除術、および直腸がんのハルトマン手術やマイルズ手術なども実施していますので、近隣の先生方のご紹介をお待ちしています。

今後も当院は熊本県地域医療支援病院、熊本県指定がん診療連携拠点病院、熊本県難病診療分野別拠点病院、そして熊本県地域医療連携ネットワーク拠点病院として、責任ある地域医療への貢献に努めてまいりますので、皆様方には今後とも変わらぬご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



# 当院の新型コロナウイルス感染症 診療について

診療支援部長兼内科部長 呼吸器科 中村 和芳



新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) は、2019年12月以降中華人民共和国の湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎患者から検出された新種のコロナウイルスです。2月11日、世界保健機関 (WHO) は新型コロナウイルス感染症の正式名称を「COVID-19 (coronavirus disease 2019)」と決めました (以下、COVID-19)。

武漢渡航歴のない国内第一例目が発生した2020年1月より、当院でも新型コロナウイルス感染症対策本部を設置し、定期的に会議を開催し対策を練りました。熊本県では、2020年2月に熊本市で感染者が報告され、第1波は県内唯一の第一種感染症指定医療機関である熊本市市民病院が殆どの症例の対応をされました。当院のある合志市は、菊池市、菊陽町、大津町などとともに菊池保健所管内に属します。第1波では、菊池保健所管内での患者さんの発生はありませんでした。

第1波襲来時から上山院長より『自分が感染しないこと』『ウイルスを家庭内に持ち込まないこと』『院内クラスターを起こさないこと』の3つに注意するようお願いがありました。スタッフ全員、来るであろう波に備えて戦々恐々となりながらもCOVID-19と対峙するべく病院スタッフが一致団結して診療体制の構築、マニュアル作成などの準備を行いました。外科系医師にも発熱外来を担当してもらいました。

当院では、第2波の7月末よりCOVID-19患者さ

んの受け入れを行いました。COVID-19診療に従事してまず感じたことは、『COVID-19診療に必要なのは体力より胆力』ということです。また、あるエッセイの一節にあった『物事を最初に始める人の苦労は並大抵ではない』ということも実感しました。

日本感染症学会が発表した『COVID-19に対する抗ウイルス薬による治療の考え方』第1版 (2020年2月26日) は、抗ウイルス薬に関するわずか6ページの記載でした。しかし、最新版である同第10.1版 (2021年11月10日) は22ページにも及び、図に示すように症状、病態、重症度別の治療薬が明示され、我々は当初より明らかに多くの有効な武器を持ち得たことが理解出来ます。当院でも第3波くらいまではマンパワーなどの問題もあり、呼吸不全が急速に進行する症例は高次医療機関に搬送し加療をお願いしました。しかし、第5波からは、上山院長をスーパーバイザーとした Team COVID-19 が結成され、ネーザルハイフロー症例も多数経験し、挿管症例も経験しました。今後、第6波がいつ、どのような大きさで来るのか全く予想が付きませんが、当院スタッフ、チームメンバーも明らかにバージョンアップしており、第2波当初より冷静に対応出来ると考えています。最後にCOVID-19診療に多大なご尽力を頂いた当院の全てのスタッフ、菊池郡市医師会スタッフの皆様、菊池保健所スタッフの皆様、県内医療機関スタッフの皆様に感謝申し上げます。

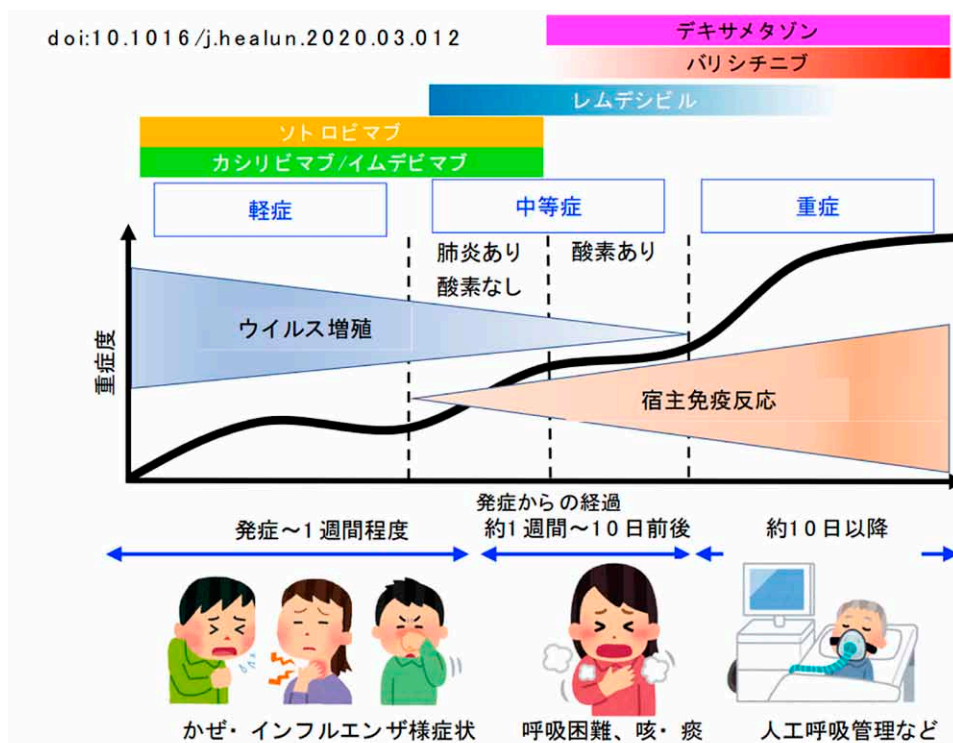


図. COVID-19の重症度と治療の考え方

COVID-19 に対する薬物治療の考え方 第10.1版 (2021年11月10日) 日本感染症学会

# 病棟・部門紹介 No.13

## つくし2病棟のご紹介

つくし2病棟看護師長  
平岡 真由美

つくし2病棟は、重症心身障害児（者）の医療ケアと介護・療育を主とした、障害者福祉サービスを提供している病棟です。脳性麻痺・水頭症・髄膜炎後遺症などによる重症心身障害児（者）の方々が入院されており、健康管理と日常生活の援助、療育を行っています。入院患者さんの平均年齢は53.3歳であり、平均入院期間は36年に及びます。健康管理の進歩により成人から壮年期、老年期を迎える方も多く、今年は5名が還暦、2名が古希のお祝いを迎えられました。その一方で、ライフサイクルでは、加齢による身体機能の緩やかな低下がみられる時期でもあります。長期に渡る入院生活の中で、医師・看護師・療養介助専門員・理学療法士・作業療法士・児童指導員・保育士・栄養士などの多職種で連携し、生涯発達を支援するとともに、健康を保持し心身の機能低下を最小限にできるよう取り組んでいます。

病棟での療育では、ゲームや季節の行事・中庭の散歩、毎月の誕生会などを感染対策をとりながら、実施しています。重症心身障害児（者）病棟の特徴のひとつとして、言語的なコミュニケーションが取れる患者さんは少ないです。しかし、日々の療育や関わりの中で、笑顔があったり、明るい声を聴くことができます。時には、苦痛の表情を見ることもあります。職員一同、患者さんの表情・機嫌・食欲・活動性・睡眠覚醒リズムなどを注意深く観察し、患者さんの思いに近づく支援が大事です。また健康管理では「いつもと違う」体調の変化に、いち早く気づく看護を実践できるよう努めています。

昨今は、新型コロナの感染防止対策のため、病棟の様子も大きく変化しました。生活の場であるつくし2病棟ですが、入院患者さんの院外への外出はできず、家族の面会も制限があります。また、人との距離を保つために、病棟行事も以前のように入院患者さん全員が一同に集まって実施することはできません。このように重症心身障害児（者）は社会参加の機会が減少すると、身体機能の低下が加速するといわれています。そこで他者との交流を楽しめるような、健康状態を維持していけるような環境づくりや行事の工夫が重要です。

今後も、ご家族・成年後見人の皆様とのつながりも大切にしながら、一人ひとりの患者さんに寄り添い、その人らしく穏やかな日々を過ごせるような医療・看護、生活支援を目指していきたいと思います。



## 開放型病院登録医紹介

### 岩根クリニック

院長／岩根 英治

熊本県菊池市隈府110

TEL 0968-25-4230 FAX 0968-24-5501

診療内容／胃腸科・外科・内科

診療時間／ 8:30～12:30

14:00～17:30

診察日	月	火	水	木	金	土	日・祝
8時30分～12時30分	○	○	○	○	○	○	×
14時00分～17時30分	○	○	×	○	○	○	×

※土曜日午後の診察時間は16時までとなっております。

岩根クリニック 岩根院長先生には、平成23年8月より当院開放型病院登録医として、多くの患者さんをご紹介いただいております。

菊池市に開業され、消化器科、外科を中心に、地域の患者さんに向けた診療を行ってまいります。

胃・大腸内視鏡の精密検査を実施してまいります。また、菊池市の中心に立地しており、交通の便の良い環境となっております。





# 病棟・部門紹介 No.14

## 臨床工学技士(室)のご紹介

主任臨床工学技士  
廣田 嘉彦

臨床工学技士(室)は医療安全管理室長、医療安全管理係長のもと臨床工学技士2名のスタッフで業務に取り組んでいます。臨床工学技士の歴史はまだ浅く、日本で国家資格として制度化されたのは1987年(約34年)と比較的に新しい医療職です。現在、全国で臨床工学技士として働いている人は約24,000名いると言われています。医師(約33万人)、薬剤師(約31万人)、看護師、准看護師(約156万人)などと比較すると、まだまだ少ない職種です。実際の現場では臨床工学技士は現在の2倍の数が必要との声もあり、その数は足りていないのが現状です。

臨床工学技士の主な業務は、生命維持管理装置などの機器の操作代行や管理、点検、修理を行う職種です。有名な業務では人工透析業務やテレビやドラマでよく見かける心臓手術時の体外循環装置操作、集中治療室(ICU)などでの経皮的心肺補助装置(PCPS)操作や最近有名になった体外膜型人工肺(ECMO)の操作および管理を行う仕事です。操作する機器の多くは重要臓器の一時的な代行や補助であり正しい技術と経験、知識が必要な職種だと考えております。

当院では人工呼吸器の管理や点検・修理業務、院内にある大小様々な医療機器の一元管理であるME機器中央管理業務、手術室医療機器管理業務、心臓カテーテル検査や経皮的冠動脈形成術(PCI)時の医療機器の操作業務など診療科の枠を超え日々働いています。様々な医療機器を操作するにあたり、専門的な知識の習得と向上を目的に各分野医療機器に関するライセンスを多く取得しております。専門ライセンス取得による知識と経験を現場スタッフに伝え、安心安全な医療現場を目標に日々努力しています。当院では患者さんの呼吸を助ける人工呼吸器が1日平均80台と多く駆動しており、患者さんの日々の観察や機器の消耗部品交換・機器の定期的なメンテナンスを行い、患者さんが安心できる機器の提供に努めています。心臓カテーテル検査ではチームの一員として医療機器の操作を行っており、昨年は経皮的冠動脈形成術(PCI)約120例、その他の症例合わせ合計約200症例実施しております。また、来年度にはアンギオ室(心臓カテーテル室)の撮影機器更新を予定しており、それに伴い治療診断装置や補助循環装置も更新予定です。

最後に、今後さらに医療現場で操作する医療機器が増え、より特殊な技術と知識が必要となります。患者さんの治療に必要なまた、体の一部となる医療機器を適切に操作し「思いやりの心」で安心安全な医療を提供していきたいと考えております。



人工呼吸器点検



心カテ風景

## 開放型病院登録医紹介

### 北野小児科医院

院長/北野 昭人

熊本県熊本市南区近見2丁目2-30

TEL 096-352-8990 FAX 096-356-0830

診療内容/小児科

診療時間/ 9:00~12:30

14:30~18:00

診察日	月	火	水	木	金	土	日
9時00分~12時30分	○	○	○	○	○	○	×
14時30分~18時00分	○	○	○	×	○	×	×

※祝日は休診となります。

北野小児科医院 北野院長先生には、平成23年8月より当院開放型病院登録医として、多くの患者さんを紹介いただいております。

熊本市南区に開業され、小児科を主体として地域の多くの患者さんの診療をされておられます。乳幼児健診、発育の健康相談など患者さんに寄り添った医療に貢献されておられます。また、西熊本駅に近い立地で、交通の便の良い環境となっております。



# 皮膚・排泄ケア認定看護師の活動について

皮膚・排泄ケア認定看護師 勝木 信敬



認定看護師は特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を有するものとして、日本看護協会の認定を受けた看護師を指します。当院では現在8名が在籍しており、看護ケアの広がりや質の向上を図るために実践・指導・相談の活動に日々取り組んでいます。

皮膚・排泄ケア認定看護師は創傷 (Wound) ・人工肛門 (Ostomy) ・失禁 (Continence) において、看護ケアの視点で改善を図ることが専門領域であり、「傷を治す」ことを目的に活動しています。また、NST (栄養サポートチーム) ・SST (摂食嚥下サポートチーム) など多職種で構成されたチームと連携を図り、組織横断的な役割も担っています。

褥瘡を治すためには「何の軟膏を塗れば良いか」といった処置や治療がフォーカスされがちです。しかし、創部に負担をかけない柔らかいマットへの変更や、安楽に過ごせる姿勢の調整 (ポジショニング)、栄養状態改善のための介入など様々な看護介入により褥瘡の治癒を促進させることができます。

本年度より新たな試みとして、認定看護師・看護師特定行為研修修了看護師で構成されたチームによる病棟ラウンドを開始しています。認知面・糖尿病・摂食嚥下機能の低下など複雑で多角的なアプローチが必要となるケースが多く、それぞれの専門領域の見地から評価を行い、どのような改善を図ることができるか目標を明確にして、領域ごとの専門的技術を提供できるよう病棟スタッフと共に検討を行っています。

菊池圏域では、当院も含め常勤の皮膚科医が在籍する病院が少ないという背景もあり、「退院後の創傷治療・予防についてどこに相談したら良いかわからない」といった声も聞かれます。創傷を有する患者さんが再発予防や適切なケア・処置が継続できるように、カンファレンス等を通して情報共有し、退院後も適宜相談対応を行っています。地域においても看護ケアの質向上に貢献できるように出前講座も受けていますので、お気軽にHPよりお申し込みください。

